

渡邊 真弥

WATANABE Manami



自然と成る -重/自然となる -織/自然と成る -絡
油彩、カンヴァス

『自然と成る』

私にとって「自然」とはエネルギーの象徴である。自然の持つエネルギーとは、見る人に力や栄養を与え、活力を高めるものだと考える。私は私自身の作品を通して、そのエネルギーを鑑賞者と共有したいと思っている。その中で私が描く「自然」は樹木などの植物をモチーフとした風景である。

特に樹木は、ゆっくりとした時間の流れの中で、成長し、季節に応じてその色や姿を変化させ、常に変化を繰り返しながらも、長い時の中を生き続けている。

このことから、人とは流れる時間の速度が異なるように感じられ、実際に経過した年数が大きく異なる木々は、人や他の生命体の営みとは異なった魅力を放っていると感じる。これまで私は「自然」から感じ取ることができる「生命力」や「癒し」「神秘性」などを表現してきたが、日常と非日常、そのどちらを強く感じたかによって、作品のテーマ性や着地点は異なっていた。そのため、植物の持つ自然の色や、それを映し出す光と影は、作品に大きな影響を与えていた。

そして修了制作では、私の追い求める「自然」を表現した。特に、根は、より強いエネルギーを感じさせる場所であり、私がテーマとする「力強い生命力」を象徴すると考える。大樹の根を描くことで、木のスケールをより想像しやすくなり、環境と場所も伝わるような構成を意識して描いている。

私の追い求める「自然」は力強さや開放感を感じさせるものであり、今回このモチーフを通して、自分自身の内面と向き合っていくことが最も大きなテーマとなった。

木々はその姿に成長するまでの年月や、環境に適応した形へと変化を遂げた痕跡が刻まれているため、その過程を表現するためには、細かな描写と深みが必要だと考えている。この作品では、多くの時間を費やし、幾度も絵の具を重ね、奥行きを作り、質感表現にこだわることで、より「自然」本来の姿に寄せていくことに注力した。

さらに私が大学院生活を経て学び取った知識や経験、感情や考えといった私の内面を肉付けすることで、これまでの作品にはない「私の自然」を描いている。

創作物には、作者の存在が見え隠れする。私自身は「自然」をモチーフとして描いているが、たとえ描く対象が「自然」ではなくとも、筆の赴くまま描き進め仕上がった作品は、画面の中に生まれた「私の自然」であると言えるのだろう。